

「チャレンジキャンプ」報告書

令和5年8月12日（土）～8月13日（日）

【目的・趣旨／概要】

防災・減災の観点を加えた体験活動を通して、「自分の命は自分で守る」「お互いに助け合う」という青少年の自助・共助の意識を育む。

【連携先】

福島大学人間発達文化学類 初澤 敏生 教授

【参加者】

対象：小学生4年～6年生

実績：15名

【プログラム概要】

【集合・受付】【はじめの会】 1日目 10時30分～12時00分

次長より今回の事業でどんなことを学ぶかについて話があった。1日目は共助の日と設定し、「お互いに助け合う」ことを伝えた。

【昼食】 1日目 12時00分～12時40分

【自然の家ココドコ】 1日目 12時45分～14時00分

導入のプログラムとして、防災・減災に関わる設備を知ると同時に、日常生活への関心を高めることをねらいとした。本所で提供しているプログラムを防災・減災版に作り替えて実施し、アイスブレイクと避難訓練も兼ねて行うことができた。

【野外炊事①】 1日目 14時00分～18時00分

通常のカレー作りのプログラムに加えて、多様性を鑑みて乳幼児・高齢者・外国人のそれぞれに対してどのような配慮を行うかを考えることをねらいとした。あえて調理方法は説明せず、グループごとに合意形成や協力の必要性を感じさせるようにした。乳幼児用におかゆを準備、高齢者用に軟飯で用意、外国人用に豚肉を後入れするなどグループごとに課題に応じた工夫が見られた。

【キャンプファイヤー】 1日目 18時30分～19時30分

コミュニティ意識をさらに高めるために、役割やゲームを通して交流を図ることをねらいとした。活動の中で今日の活動を時系列にふり返るゲームを入れ、ふり返りにつなげる工夫を加えた。

【ふり返り】 1日目 19時30分～20時30分

ワークシートを用いて自由記述によって1日目の学びをふり返った。共助の日というねらいを再度確認し、活動の中でどういった工夫をしたのかグループで話し合い、発表を行った。

【入浴】 1日目 20時40分～21時20分

【朝のつどい】 2日目 7時00分～7時20分 ラジオ体操等

【朝食】 2日目 7時30分～8時10分

【野外炊事②】 2日目 9時00分～13時30分

2日目は自助の日と設定し、「自分の命は自分で守る」ことを伝えた。通常焼きそば作りのプログラムを参加者各自が全て行うことで、困難を自主的に乗り越える意識を高めることをねらいとした。1日目の野外炊事をもとに調理、火起こしなどを全参加者が自分で行うことができた。1日目よりさらに集中して取り組む姿が見られ、共助を意識して片付けを行う様子もあった。

【ふり返り】 2日目 13時30分～14時00分

ワークシートを用いて自由記述によって2日目の学びと全体を通したふり返りを行った。自助・共助というねらいを再度確認し、活動の中でどういった工夫をしたのか発表を行った。

【おわりの会】 2日目 14時00分～14時30分

本事業を振り返る場として、おわりの会を行った。初澤先生に講評をいただき、子どもたちがこの事業を通して学んだことについて総括した。

【解散】 2日目 14時30分

【成果】

- ・前年度に引き続き、講師である初澤敏生教授と連携し、事前の打ち合わせを行いながら、プログラム開発をし、事業運営をすることができた。
- ・小学4～6年生を対象としたことで自助・共助それぞれのねらいに迫るプログラムを実施できた。
- ・所のプログラムを防災・減災の観点で実施することで、プログラムに価値を加えるとともに普及啓発を図りやすくすることができた。
- ・スタッフ間で事前の情報共有に十分な時間を設定したため、活動のサポートをスムーズに進めることができ、参加者の活動をより充実させることができた。

《参加者の声》

- ・自分のことは自分で守ると、だんだんとやらなきゃいけないことが身につくと思いました。
- ・自分の命は自分で守るというテーマを達成することができた。
- ・2日間で覚えたことをこれから生かしていこうと思いました。
- ・知らないことやできないことがあったけど、みんなで助け合いながら過ごせて楽しかった。
- ・生活していて体験できないことをできたのでとてもいい経験になったし、いい思い出もできた。

【課題と方策】

- ・募集人数30名に対し、21名の応募があったがキャンセルが続き15名の参加となった。今年度は防災の日の直前に事業を予定したが、お盆休みにかかる時期だったため、応募が少なかったと考える。次年度の実施時期は検討を要する。
- ・自助・共助の内容より火起こしの方が活動の困難さが高く、ねらいの焦点化が難しい場面があった。ねらいに迫ることができるようプログラム内容のさらなる改善が必要。
- ・上記に関連して量的なアンケートでは変容が見られておらず、質的なアンケートによって成果を得る見込みだが、今後は量的にも得られるようねらいをより分かりやすく伝え、ふり返りにおいても日常生活につなげるような工夫を加えていく。
- ・令和7年度に普及啓発を図っていくにあたり、青少年教育施設がプログラムを取り入れやすくすることができるよう防災・減災プログラムアイコンを作成予定。

国立那須甲子青少年自然の家 [作成] 企画指導専門職 大塚 渉

